
Multi Element

kon

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

M u l t i E l e m e n t

【Nコード】

N 5 1 1 3 B A

【作者名】

k o n

【あらすじ】

どんな物質にも変化することができる特殊元素Multi Element。そしてそれを中心とした世界で繰り広げられる、バトルあり、恋あり、笑いありのSF学園物語!!!!

〈序〉（前書き）

Multi Element。それはどんな物質にも変化する特殊元素。そしてそれを中心とした世界。そんな中で暮らす少年？織多^{オダ}刻十^{コクト}と学園の仲間達が繰り広げるバトル、恋、コント（？）。是非お楽しみください！！！！

〈序〉

春だ。オレはヒラヒラ散っている桜の花を見ながら思う。平穩だなあ。

「ダンっ」勢いよく教室のドアが開き、スーツに身を包んだ女性が入ってくる。

「皆座れ。」静かにその女性が言うのと同時に先ほどまでぺちゃくちゃと話していた女子たちが席に着く。

「入学おめでとう。私は篠原紀伊^{シノハラキイ}。君たちの担任だ。私の自己紹介は以上だ。」

自己紹介？名前しか言っていない気がするんだが。周りもかなり引いてるぞ。いいのか？しかし、彼女の口調、容姿からかなり厳しく、有無を言わさない雰囲気を感じられる。

「それでは皆に氏名順に自己紹介をしてもらおう。まずは…」

オレの隣に座っていた少女が起立する。

「赤瀬弥来^{アカセミライ}です。よろしくお願いします。」

長い黒髪を後ろでリボンで束ねた赤い瞳をもつその少女は落ち着いた物腰で自己紹介を終えた。へえ、赤瀬ね…どっかで聞いた気がするんだが。

確か小学校まで仲の良かった…

「……だ。織多^{オリダ}！」「ハイっ」「お前の番だ。」「すみません。」

オレは立ちあがって口を開く。

「織多^{オリダ}刻十^{コクト}です。えっと……よろしくおねがいします。」

オレが自分の名前を言ったとたん、教室中がざわめきだす。予想はしていたが、いざこうなるとさすがに滅入る。

オレは織多刻十。15歳。このMER^{メルかくえん}学園に今日入学した。こう見えて結構な有名人だったりする。その理由を説明するにはまず、現在の世の中の様子を説明しなくちゃいけない。今、この世の中はM

ulti Element《マルチ?エレメント》、通称MEを中心として回っている。このMEはオレの父親、織多博十オダハクトの弟、つまりオレの叔父、織多博久オダハクヒサによって発見された特殊な元素だ。このMEは人間の心臓の中にあるMECミークに引きつけられるという性質をもつ。そしてこのMECの宿主はMERメルと呼ばれ、引きつけられたMEを操ることができる。ちなみに、博十は史上初のMERである。しかしMECをもっていない者もいる。そういった人はNERネルとよばれる。MEは様々な物質に変化できるため、色々な用途がある。しかしMEの扱いは非常に難しいためこのMER学園で育成され、MERであるオレもこの学園に入学したのだが、発見者の甥であると同時に史上初のMERの息子であるオレは嫌でも名前が知られるわけで…。これがさっきのざわめきの原因。

「静かにしろ。」

篠原先生が怒り半分、呆れ半分といった口調でクラスを鎮める。オレは溜め息をつきながら着席する。今度はオレの後ろの席の生徒が自己紹介を始めた。オレは人の名前を覚えるのは得意じゃないから、そいつの自己紹介をよく聞こうと思うのだが、左から強烈な視線が…。

「えつと、何か用?」

オレはこらえきれず赤瀬に尋ねた。

「っ!!なんでもないです!!」

顔を真っ赤にしてそっぽをむく。ど、どうした?もしかして、オレ嫌われてんのか?特に心当たりがないんだが…。まあ考えても仕方ない。嫌われててもそのうちどうにかなるだろう。そうしてオレの学園生活が始まる。

〈序〉（後書き）

今回この「Multi Element」を読んでいただき誠にありがとうございます。書かせていただいた、konという者です。初投稿でしかもまだ中学生という若輩者ですが、頑張って書いてみました。感想はいろいろあるとおもいますが、ご指摘いただければ次話から改善していきたいとおもいます。

今後の予定ですが、次話として、「緇」というのを出そうと思います。今回の「序」はプロローグといった解釈で、「緇」から本編だと思っけていてください。では、また今度もよろしく願います。

〜 緋〜 (前書き)

SF 学園物語、第二話

〜 継 〜

「それでは、早速授業を始める。」

ホームルームでの生徒全員の自己紹介が終わると、篠原先生が教壇にあがる。同時に黒板にMEの構造図が映る。

「MEは酸素原子などと違い、原子核がなく

陽子、電子、中性子が1つずつ、合計3つの粒子が同心円上を回転している。だからこのMEが複数集まれば様々な原子に変化することができ、さらに……………」

…訳わかんねえぞ…。篠原先生の説明が悪い訳ではないんだが。左の赤瀬は黙々とノートをとっている。すげえな、おい。あとで見せてもらおうかな…。

そのとき急に頭に衝撃が。

なんと上からたらいが落ちてきたのだ。

「……………ッ」

オレは痛みのみあまり悶絶する。

「織多。何をよそ見しているんだ？」

篠原先生がMEをステンレスに変化させてオレの頭に落としたりしない。

「すみません…」

「まあいい。今見せた通り、MEは自身から離れていても扱うことができる。まあ訓練は必要だがな。ここまでで何か質問のある者はいるか？」

先生が尋ねると赤瀬が挙手する。

「あの、実際にMEを操るにはどうすればいいんでしょうか？」

おお、ナイス赤瀬。オレも聞きたかった。

さつき先生がオレの頭にたらいを落とすとき、先生は何か機械を持っている様子はなかった。ただオレの頭上を見ていただけだった。「言葉で説明するのは難しいんだがな。まあざっくりいうと、ME

の存在を意識して、そのあとに変化させたい物を思い浮かべることができる。感覚が湧かないと思うが、次の授業で実習を行う。要は慣れることだ。」

そしてチャイムが鳴り響く。

「では、授業を終わる。2校時は実習だ。遅刻のないように。」

* * * * *

「あの、赤瀬さん？頼みがあるんだけどいいかな？」

「あ、はい！！なんですかつ」

ん？なんでこの子はオレと話すときだけ異常に慌てるんだろうか。やっぱり女の子はよく分からない…

「ちよつとノート見せてくれない？オレ、授業よく分からなくてさ。」

「

「い、いいよ！ど、ど、どうぞ…」

「ありがとう」

オレが礼をいうと、顔を真っ赤にして

「ど、どういたしまして…」

と小さな声でいった。オレなんか悪いこといったかな？

「あの、さ、私のこと覚えてる？」

「えっと、小学校の時に…」

「そ、そう！！久しぶりです！！！！」

赤瀬が目を輝かせて言う。ど、どうしたんだ？

「あ、あのね…」キーンコーンカーンコーン

赤瀬が何かいいかけたところでチャイムが鳴る。

「ヤバツ。赤瀬、席に着こうぜ。」

「うん…」

赤瀬がしゅんとした顔でいう。

「早く席に着け！！授業を始めるぞ！！」

入ってきた先生が怒鳴る。

* * * * *

(織多くんが私のこと覚えててくれたッ…)

私は小学校の時に父親の転勤のため引越した。思いを告げないまま。

織多くんが好きだった。というより好き、現在進行形だ。

でも、ライバルが多い。後ろ女子二人がさつき囁き合っているのを聞いた。

整った顔立ちで、スタイルもいい。家事もひととおりできるし、面倒見がいい。人懐っこい笑顔、仕草、言葉にも魅力がある。

小学校のときにも女の子から人気があったが、成長してぐつと男らしくなった気がする。

ただ、とてつもなく恋愛感情に疎い。小学校のときに10人ほどが彼に告白したらしいが、全部告白だとわからず、友達としての好きと勘違いしたらしい。恐ろしいことだ。しかし、今朝織多が自分と同じ学校、クラスだと知った時にはかなり嬉しかった。それにさつきは話しかけてくれた。

(ちよつと頑張ってみようかな。)

恋する女の子ほど強いものはないだろう。

* * * * *

「皆席につけ。2校時めを始めるぞ。」

さてと、赤瀬に借りたノートで1校時めの埋め合わせはなんとかなりそうだ。しかし、ここからが問題だ。オレの体のなかにMECがあることは確かだから、MEを全く扱うことができないことはないが、やはり才能というものがあるわけで。劣等生とよばれてしまう人もいる。自分がそうならないことを祈るばかりだ。

「これからMEの実習を行う。全員、マニュアルはよんであるな? マニュアル? なんのことだろう…あ。」

「先生…大変申し上げにくいのですが…」先生がオレの頭上を見る。またさつきのたらいを落とす気かッ。オレはとっさに頭を覆った。

へッ、オレだつて馬鹿じゃない。何度も同じ手には…サクツ

なんだろう、この音は。状況を整理…机に突き刺さっているのは、
ハウチヨウ。包丁つてたしか刃物だよな。刺さったら死ぬよな。オ
レは血の気がひくのを感じた。

「すいません…」

「しかたない。今日は学園から貸し出すから、次の授業までに覚え
てこい。」

「はい…」

今日から3日間は徹夜だな、はあ…

「それでも授業を再開する。まずは簡単な金属の生成だ。まず皆目
をつぶれ。次に周囲にMEがあることを意識しろ。できたら適当な
金属を思い浮かべろ。出来るだけ正確に詳細にだ。よし。では皆目
をあける。」

オレは目を開けると机のうえに赤褐色の金属の小さな球体が生成さ
れていた。よし。なんとかできたぞ。と想っていたオレの左で何か
が爆発した。驚いた拍子に生成されたオレのMEは元素に戻ってし
まった。おそらくMERがMEに意識をむけている間だけ生成をキ
ープできるのである。しかし、赤瀬は何をしでかしたのだろう。爆
発の様子から誤って水素を生成してしまったようだ。おいおい…下
手したら大事故だぞ。

まあオレも人を心配するほど余裕はないので、もう一度銅の球体を
生成しな。まだ半径1センチほどの球体を生成するのに1分弱
かかる。これだとまだまだ未完成なんだよなあ。さつき先生はなか
なかの大きさのたらいを離れたところから1秒足らずで生成した。
やっぱりそう考えるとすげえな。

キンコーンカーンコーン

終業のチャイムだ。つぎは…おお！飯だ！

「これで実習を終わる。課題として、金属の生成を習得しておくよ
うに。以上だ。」

* * * * *

「お、織多くん！あの、もしよかったら一緒にご飯食べない？」

「おお、いいぜ。でも、赤瀬が誰かを誘うなんて思わなかったよ。」

「そ、それは…モゴモゴ」

赤瀬はもごもご何かいったがよく聞き取れなかった。まあ問い詰めても可哀想なので黙っておこう。

「オレ、外で食べたいから、屋上いかないか？」

「えっと…二人で？」

赤瀬が手をもじもじとさせながら言う。トイレにでもいきたいのだろうか。

「まあ二人で話したいこともあるしな。」

オレがそういうと、赤瀬は顔をあかくして黙ってしまった。しばらくの沈黙。うー、なんだか気まづくなってしまった。オレが原因なんだろうか。これでは埒があかないので赤瀬の手をひいて屋上に連れていった。途中、かなり黄色い声が聞こえたのはなんだっただろう。

* * * * *

屋上にはオレと赤瀬以外だれもない。静かな場所はいいもんだ。時間はたっぷりあるが、腹が減ったので、弁当箱をあける。

ちなみにオレの弁当は自分で作った鶏のマスタード焼きと、ポテトサラダだ。赤瀬のは海老と山菜の天ぷらと赤飯だ。

「うまそうだな。母さんが作ったのか？」

「う、うん。織多くんは自分で作ったの？」

「まあな。あ、そうだ。もうそろそろ昔みたいに刻十でいいんじゃないか？」

「そ、そうだね。じゃあ私も弥來でいいよ。」

「おう。あ、弥來。ほっぺたに何かついてるぞ。」

オレは手をのばしてそれをとった。

「ふえ？」

弥来は間の抜けた声をだしたあと顔を赤くして、「 & a m p ;
…」

と意味不明なことを発してうつむいた。どうしたんだ…

「おーい、弥来さん？」

* * * * *

「あれが織多刻十…」

青い目をもつその少女はつぶやいてその場を離れた。

〜 緋〜 (後書き)

今回はこのMulti Elementを読んでいただき、ありがとうございます。

まだまだ至らぬ点が多いと思いますが、楽しんでいただければ幸いです。

今回は学園生活を中心に書きましたが、次回はバトルを入れていこうと思います。

また最後に出てきた「青い目を持つ少女」も登場させたいと思います。

現在、絶賛受験中の中学三年生なので、書くスピード亀の遅さも凌駕するほどですが気長にまってくださいね。では次回もよろしくおねがいします。また、この小説に対する感想、意見、批評も大変嬉しいのでどんどんお願いします。ではまた次回!!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5113ba/>

Multi Element

2012年1月15日00時04分発行